

I-14 Transfer matrix法に関する一考察  
(双曲線関数項を含む場合)

大阪市立大学 正員 中井 博

1. まえがき

薄肉部材より構成された土木構造物のより忠実な応力解析をする際、transfer matrix を活用すると便利であるが、matrixの要素中に双曲線関数で表わされた項が存在し、しかもその関数値が極端に大きい場合、誤差が生じ所要の精度が期待できない場合をしばしば経験する。本文はこのような欠点を解消するために、2, 3の具体的な問題を例として考察を試みたものである。

2. はりのモリねじり問題

はりのモリねじりに関する基礎式は、ねじり角を $\theta$ 、分布トルクを $q_t$ とすると同知のとおり、<sup>(1), (2), (3)</sup>  
 $d^2\theta/dx^2 - d^2\theta/dx^2 = q_t$ 、ただし  $d = \sqrt{GK/EI_w}$  ( $GK$ : ねじり剛性,  $EI_w$ : モリねじり剛性) (1)

で与えられる。これをtransfer matrix法で表わすと、いわゆるfield matrixは式(2)のようになる。

式(2)では、双曲線関数項とそうでない項とが混在しているので、これを分離するために、

$$\left. \begin{aligned} \Theta_s &= \theta - M_w/GJ \\ T &= T_s + T_w \end{aligned} \right\} \dots (3)_{1,2}$$

なる新しい物理量を考へる。すると、式(2)は $\Theta_s, T$ を用いて表わすことができ、2行目と3行目のみ双曲線関数項を含むことになる。そこで、

$$\left. \begin{aligned} \tilde{\Psi} &= \psi / \cosh dl \\ \tilde{M}_w &= M_w / \cosh dl \end{aligned} \right\} \dots (4)$$

とすれば、式(3)の変換後、Field matrixの2, 3行目を $\cosh dl$ で割ったものを $\tilde{F}_k$ と表わせば、式(5)が得られる。

$$F_k = \begin{pmatrix} \theta & \theta' & M_w & T_w & 1 \\ 1 & l & -(1-\cosh dl)/GJ & -(\sinh dl \cdot dl)/GJ & -q_t(1-\cosh dl + dl^2/6)/dGJ \\ 0 & 1 & d \sinh dl/GJ & (1-\cosh dl)/GJ & q_t(\sinh dl - dl)/dGJ \\ 0 & 0 & \cosh dl & -\sinh dl/d & -q_t(1-\cosh dl)/d^2 \\ 0 & 0 & -d \sinh dl & \cosh dl & -q_t \sinh dl/d \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \dots (2)$$

$$\tilde{F}_k = \begin{pmatrix} \Theta_s & \theta' & M_w & T & 1 \\ 1 & 0 & 0 & l/GJ & -q_t l^2/2GJ \\ 0 & 1 & d \tanh dl/GJ & (1-\cosh dl)/GJ \cosh dl & q_t(\sinh dl - dl)/GJ \cosh dl \\ 0 & GJ \tanh dl/d & 1 & -\tanh dl/d & -q_t(1-\cosh dl)/d^2 \cosh dl \\ 0 & 0 & 0 & 1 & -q_t \cdot l \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \dots (5)$$

したがって、構造物全体の計算は、

$$\tilde{Y}_{k,n} = \tilde{F}_k P_{n-1} \tilde{F}_{n-1} \dots P_n \tilde{F}_n \dots \tilde{F}_2 P_1 \tilde{F}_1 Y_{1,0} \dots (6)$$

によって行なうことができる。ただし、 $P_k$ はpoint matrixとする。たとえば、 $k+1$ パネルの状態量 $\tilde{Y}_{k+1,0}$ (左端)を初期ベクトル $Y_{1,0}$ で表わせば、式(7)のようである。ここで、要素中 $\{$ を付けたものは、 $\>$ ぎのfield matrix $\tilde{F}_{k+1}$ を乗じる際、2, 3行目の要素を求めるときには下側に示す値を、その他は上側の値を用いるものとする。

$$Y_{k+1,0} = \begin{pmatrix} \Theta_{s,1,0} & \theta'_{1,0} & M_{w,1,0} & T_{1,0} & 1 \\ 1 & 0 & 0 & \frac{kl}{GJ} & -\frac{q_t}{2GJ}(kl)^2 \\ 0 & \frac{\cosh kl}{\cosh^2 dl} & \frac{d \sinh kl}{GJ \cosh^2 dl} & \frac{1-\cosh kl}{GJ \cosh^2 dl} & \frac{q_t \sinh kl - kl}{dGJ \cosh^2 dl} \\ 0 & \frac{GJ \sinh kl}{d \cosh^2 dl} & \frac{\cosh kl}{\cosh^2 dl} & -\frac{\sinh kl}{d \cosh^2 dl} & \frac{-q_t(1-\cosh kl)}{d^2 \cosh^2 dl} \\ 0 & 0 & 0 & \begin{cases} 1/\cosh^2 dl \\ 1/\cosh^2 dl \end{cases} & \begin{cases} -(q_t kl + T_p)/\cosh dl \\ -(q_t kl + T_p)/\cosh dl \end{cases} \\ 0 & 0 & 0 & 0 & \begin{cases} 1/\cosh^2 dl \\ 1/\cosh^2 dl \end{cases} \end{pmatrix} \dots (7)$$

(ただし、算断面、算パネル割の場合)

ところで、はりが中向支点でねじりに対して剛支持されている場合、式(3)より $\theta$ を求め、それを0と仮定はよいが、このようにすると計算精度上好ましくないで、中向支点 $r$ の $k=3$ に生ずる未知反力 $T_{r,3}$ のほか新しい未知力 $M_{w,r}$ を導入し、式(3)より $\>$ ぎのような条件式を考へればよい。

$$M_{w,r,2} - M_{w,r}^s = 0, \quad \Theta_{s,r,2} - M_{w,r}^s/GJ = 0 \quad \dots (8)$$

さらに、 $\alpha l$  が大きい場合には、同様に  $T_{s,r}^s$  を未知量として導入して ( $T_s = GJ\theta'$ ),

$$T_{s,r}^s - T_{s,r}^s = 0 \quad \dots \dots (9)$$

なる条件式を附加すると、拘束度が大きくなり計算精度を向上させることができる。数値計算の際には、以上の式を

$$\theta_s = P_e l c / GJ_c \cdot \theta_s^*, \quad \theta' = P_e l c / GJ_c \cdot \theta'^*, \quad \bar{M}_w = P_e l c / d c \cdot \bar{M}_w^*, \quad T = P_e l c \cdot T^* \quad \dots \dots (10)$$

のように無次元化 (suffix c のつけたものが基準量) する。Facom 270/30 により Double precision を用いて計算したところ、式(2)のような従来の方法に比べて  $\alpha l$  の増大に伴う精度の劣化は見られないようである。

### 3. 曲線ばりのヨリねじり問題

曲線ばりのヨリねじりに関する基礎式は、曲げとの連成問題として取り扱うべきであるが、曲げモーメント  $M_y$  を既知とすれば、

$$d^2\theta/ds^2 - \alpha^2 d^2\theta/ds^2 = M_y/R_s - \gamma t \quad (d\theta = R ds \phi \quad R_s: \text{曲率半径}, \phi: \text{中心角}) \dots (11)$$

で与えられる。これは、2. で述べた式(1)と同形であるので、ほとんど同様な手法により精度のよい計算を行なうことができる。詳細は I-95 を参照にしたい。

### 4. 鋼床板けた橋の Shear lag 問題

鋼床板を有する  $\pi$  形断面けたのたけみ  $w$ , デッキプレート上の shear lag による軸方向変位  $f$  に関する基礎式は、けたに作用する曲げモーメント  $M$ , せん断力  $Q$  とすれば、次式のように与えられる。

$$\left. \begin{aligned} d^2f/dx^2 - \alpha^2 f &= \eta Q, \\ d^2w/dx^2 &= -M/EI - \gamma \cdot df/dx \end{aligned} \right\} \dots (12)$$

( $\alpha, \eta, \gamma$  は断面によるパラメータ)

この連立方程式を分布荷重  $q$  に対して解き、field matrix を求めると式(13)のようになる。

ここで、2. と同様に双曲線関数項を分離するために、

$$\left. \begin{aligned} w_b &= w + \gamma/d^2 \cdot f' \\ y_b &= y + \gamma \cdot f \end{aligned} \right\} \dots (14)$$

とおき、 $w$  と  $y$  の 3 行目と 4 行目の  $f, f'$

$$\left. \begin{aligned} \bar{f} &= f / \cosh \alpha l \\ \bar{f}' &= f' / \cosh \alpha l \end{aligned} \right\} \dots (15)$$

$$\bar{F}_b = \begin{bmatrix} w & y & f & f' & M & Q \\ 1 & l & -\gamma(\sinh \alpha l)/\alpha & -\gamma(\cosh \alpha l)/\alpha & -l^2/EI & -\gamma(\sinh \alpha l)/\alpha^2/EI \\ 0 & 1 & -\gamma(\cosh \alpha l) & -\gamma \sinh \alpha l & -l/EI & -\gamma(\cosh \alpha l)/\alpha^2/EI \\ 0 & 0 & \cosh \alpha l & \sinh \alpha l & 0 & \eta(\cosh \alpha l - 1)/\alpha^2 \\ 0 & 0 & \alpha \sinh \alpha l & \cosh \alpha l & 0 & \eta \sinh \alpha l / \alpha \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & l \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \dots (13)$$

(荷重項は省略)

のように単位化すると、式(16)が得られることになる。

この field matrix  $\bar{F}_b$  を用いれば、構造物全体の計算も格点行列が連続けた橋の中間点の処理も 2. で述べた方法と類似して行なうことができ、任意支持された鋼床板けた橋の shear lag 現象を精度よく解析することができる。

$$\bar{F}_b = \begin{bmatrix} w_b & y_b & f & f' & M & Q & 1 \\ 1 & l & 0 & 0 & -l^2/2EI & \eta l \alpha^2 - l^2/EI & \alpha l^2/2EI - \gamma \eta l^2/2\alpha^2 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & -l/EI & -l^2/2EI & \gamma l^2/EI \\ 0 & 0 & 1 & \tanh \alpha l & 0 & \eta(\cosh \alpha l)/\cosh \alpha l & -\gamma(\sinh \alpha l - \alpha l)/\alpha^2 \cosh \alpha l \\ 0 & 0 & \alpha \tanh \alpha l & 1 & 0 & \eta \tanh \alpha l / \alpha & -\gamma \eta(\cosh \alpha l - 1)/\alpha^2 \cosh \alpha l \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & l & -\gamma l^2/2 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & -\gamma l \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \dots (16)$$

### 5. あとがき

transfer matrix 法は、任意支持されたはりの各種の問題を解析するのに適した方法であるが、マトリックスの要素中に双曲線関数項を含めると所要の計算精度を期待できない難点があった。しかし、本文の方法によると双曲線項が分離され、また単位化されているので、これらの問題点が解決されたように思われる。さらに、本文の方法は、弾性変位上のはりや、けたの断面変形などの内題にも拡張できると考えられる。

参考文献 ; 1) Kollbrunner; Dünnwandige Stäbe '72, 2) Vlasov; 薄肉弾性ばりの理論, 3) 小松; 薄肉構造物の理論と計算